



学校教育目標：心豊かで自ら学びたくましく生きる子どもの育成

『甘え(甘えさせること)』と『甘やかし(甘やかすこと)の違い』

本校では、スローガンにも示している通り、子ども達の将来的な「自立」を目指しています。

子ども達が「自立」していくようになる為に、今、「子育て」において大切なこと、それは「甘え(甘えさせること)」と「甘やかし(甘やかすこと)」の違いを正しく理解し、区別して子育てに臨むことのようにです。

「甘え(甘えさせる)」とは？

「甘え」と聞くと「あいつは甘えている」というように一般的にはよくないイメージがあるかもしれませんが、ですが、本来、子どもの「甘え」は、親の愛情を求める行為です。

乳児期、子どもは親に抱かれる中で、まだ言葉を理解できなくても、そのぬくもりや優しさを肌で感じ取り、安心感に包まれて育ちます。そのことで、心が安定します。やがて幼児期になると親から離れて活動するようになりますが、特に何かがあった訳でなくとも、ふっと親の腕に飛び込みたい衝動に駆られたりします。

スキンシップを求めて抱きついてきたり、しつこく話しかけてきたり、夜中にグズって困らせたり・・・これらは全て子どもの「もっと甘えさせてほしい」「もっと私を見てほしい」といったサインです。子どもはそうして「甘えること」によって安心し、安定します。自分の存在価値や、親の愛情を確認しているのです。

小学生にもなると更に親から離れて活動する時間が多くなります。そうすると全てを親に守られてきた乳児期とは違って、様々な問題に遭遇します。学校では集団生活をするので、当然、様々な出来事が起こり、様々な経験をすることで、いいこともあれば悪いこともあり、不安や痛みを感じることも多々あります。そんな時に子どもはいろいろな形で親に甘えようとします。そうすることで、安心感を得たり、心に感じた不安や痛みを癒したりしようとするのです。「甘え」は、愛情を求める行為であり、親が子どもの「甘え」を受け入れるということは、子どもの情緒的な欲求に、愛情で応えるということです。

子どもはそんな「甘え」が満たされることにより「自分は愛されている」と感じられ、その揺らぐことがない「安心感」が土台となり、「自己肯定感」を高め、「自立心」が芽生え、「自立」に向かうことができるのです。幼い頃からそうした「甘え」を十分に受け入れられた子ども程、精神的自立が早いとも言われています。

「甘やかし(甘やかす)」とは？

一方、「甘やかす」とは、過干渉または過保護のことで、裏を返せば大人の都合(子どもに好かれたい・手間を省きたい・楽をしたい等)で子どもを良いように支配している状態です。親が自己満足の為に、必要以上に子どもの世話を焼いて、子どもが自分でしなければならないことを親が代わってしてやることです。子どもができる事でも、親が全てやってしまうということは、子どもの自主性を奪い、親なしでは何もできないようにする事です。そんな風に「甘やかされて」育った子どもが手に入れるのは親からの安心感や自己肯定感でもなく、当然、「自立への準備」でもありません。「自分の面倒は誰かがみてる」「誰かが何とかしてくれる」という間違っただけ認識です。「自立心」の芽を摘んでしまいます。

また、物質的な要求に対して我慢をさせずに、認めてしまうこと、すぐに与えてしまうことも「甘やかし」と言えます。

甘やかされて育った子どもには、次のような特徴が見られるそうです。

「ありがとう」が言えない。「ごめんなさい」を言わない。注意されただけで泣く。食べ物の好き嫌が多い。自力で解決できず、すぐ人に頼る。責任を持つことを嫌がる。自ら行動できない。自分の非を認められない。自分の要求が通らないとすねる。人のせいにする。金銭感覚が緩いなど・・・。

春、PTA総会で「私たちが描くべきは、将来、未来の子どもの姿です。」とお伝えしました。

秋の夜長、今一度、ご家庭でもご自分の行動や考えを振り返り、子ども達の将来の自立を目指し、「甘えさせていない。しかし甘やかしている。」ではなく、「しっかりと甘えさせている。しかし甘やかしてはいない。」ができていないかを確認し、子どもにかける「愛情」のはき違えをせず、子どもの自立を目指す、そんな子育て、そして学校教育を心がけたいものですね。

